

春風秋霜

10月号

平成28年10月3日

島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 NHK ラジオ番組を聴いて

夏休みには子どもたちの疑問に答える NHK ラジオ番組があります。車を運転する時は、いつもラジオを聞いていますが、NHK を聞くことは無かったので、子どもたちの多様な質問を新鮮な感覚で聞きました。

子どもたちは、様々な疑問を持っています。生活での体験、友達や大人との会話、本やテレビ番組などの中から疑問をもち、専門家に質問していました。どんな子供でも疑問や不思議を感じることはあると思います。でも、多くの子どもは、それを調べたり、知っている人に聞いたりせずに忘れてしまいます。

番組で質問している子どものすばらしさは、疑問をそのままにせず、解決するための努力をしていることです。また、科学的な視点をもっている子どもが多いことです。もし、この番組を島田市の子どもたちが聞いていたら、大いに刺激を受けたと思います。また、夏休みの自由研究の題材も見つかったと思いました。この番組をできるだけ多くの子どもたちに聴いてほしいと思います。

2 氷見市と島田市のスポーツ少年団交流について

島田市と富山県氷見市と長野県大町市のスポーツ少年団は、年1度の交流会を続けてきました。昨年は大町市でスキー体験をし、その前の年は氷見市で海洋体験をしています。今年の交流会には、大町市の少年団は参加しませんが、島田市と氷見市の交流会は、8月19日から21日の二泊三日で行われ、子どもたちは、蒸気機関車トーマス号への乗車、ヤマメのつかみ取りや家山川での川遊びなどを楽しみました。

お別れ会で子どもたちに楽しかったことをたずねると、家山川での川遊びを1番とする子どもが多かったです。氷見市では海で泳ぐことはあっても、川で泳ぐことはできないからとのことでした。

島田市では、伊久美川や家山川・笹間川など、川遊びのできる川が複数あります。場所によっては、深みもあり楽しく遊ぶことができます。しかし、川遊びの経験の無い子供にとっては、新鮮な体験だったようです。島田市の魅力を当たり前のこととせず、島田市の子どもたちにも体感して欲しいと思います。そのためには、教師がその魅力に気付き、価値付けをし、子供たちに伝えなくてはならないと思います。

3 全国学力・学習状況調査について

先日、中学校の体育大会を見学した時、ある学校で学力について校長と話をしました。4月に行われた全国学力・学習状況調査の結果について心配すると、校長は9月に行われた県下一斉学力調査（学調）の結果は良かったから心配はありませんと応えてくれました。

私は、自身の心配を恥じると共に、学校の4月からの努力に感謝しました。全国学力・学習状況調査は、子供たちの実態把握とその結果を指導に生かすことが大切です。学力調査は、調査時の学力のある部分を知ることができますが、それが全てではありません。結果に一喜一憂することなく、結果を基に指導の充実につなげることが学校の責任だと思います。市内の学校において指導を成果に結び付けていることが分かり安心しました。

4 島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会提言書について

9月16日（金）に上記提言書が、教育委員長に手渡されました。島田市立小学校及び中学校のあり方検討委員会（以下検討委員会）は、平成26年度に準備会を立ち上げ、委員の選考について議論し、平成27年6月に座長に武井敦史氏（静岡大学大学院教授）を迎え、本格的な議論をスタートさせました。以後、9回の検討委員会で協議を重ね、提言書を完成させました。

協議の中では、教師の多忙化解消や島田市の様々な資源の活用などを重視し、これからの島田市が求める教育の方向を議論しました。

提言書には、「地域総ぐるみで進めましょう 夢育・地育の花咲く 島田の教育」をキャッチフレーズにしています。子供の可能性を拓く夢育や島田市を好きな子供を育てる地育を充実すること、多くの教育課題を別々に扱うのではなく有機的に関係付けて扱うこと、児童生徒の望ましい教育環境を確保するという視点で学校再編を検討することが提言されています。

今後、市教委ではワーキンググループを立ち上げて検討したり、試行地域を設定して研究したりする中で、提言書の実現に向け検討を重ねていきます。各学校においても、提言書の趣旨を生かした教育課程の編成をお願いします。

5 市内小・中学校の運動会に参加して

湯日小学校では、縦割り班での一輪車演技に感動しました。技術差のある集団での一輪車演技は非常に難しく、失敗した子供が動きを止めないで演技する様子は、校技として取り組んできた歴史を感じました。伊久美小学校では、地域と一体になった演技や運営の他、大学生の力を生かしていた点が目を引きました。



中学校は、どの学校も大変落ち着いた雰囲気での体育大会でした。集団の一体感を乱す生徒がないことに、各中学校の教育の充実を感じました。

肘かけ椅子

北島 正 教育委員

「詩の吟詠」

「詩の吟詠」これを簡略にして「詩吟」と呼び、平安時代には成立していたようです。（和漢朗詠集 1012年）この時代の詩とは漢詩のことであり、「吟詠」とは声を出してうたうことで「朗詠」とほぼ同義です。感動したことを言葉に節をつけて歌い、聞く人の心に届ける。聞いた人は、音楽として受け取り、感動を共感する。洋の東西を問わず、朗詠の文化、あるいは音楽の文化は、古より定着していたようです。

日本では、和歌や俳句、さらに明治以降では新体詩まで、広い意味での詩として朗詠する文化を発展させてきました。でも、洋楽と異なる点は、楽譜がないことです。そのかわり、「口伝（くでん）」で伝承するのです。これは、和の文化の伝統的手法で、「息」でお互いの「間」を共有させ、師の感性と弟子の感性を同期、同調させることによって、言葉のもつ心を伝えるのです。これのよって、もうこの世に居ない人達とのコミュニケーションを楽しむことができます。千年・二千年前に生きた人の感性に触れて感動を共有できた時、それこそが私にとっての詩吟の楽しみと言えます。同時に、はるかな未来の人々にまで、時空を越えて感動を与えるパワーをもつ優れた詩歌の凄さには感じ入りますね。

・・・というような内容を去る8月26日 夕方 FM島田のある番組に出演して話しました。不思議なことに、「あの番組 聴いたよ」という方に未だ遭遇していません。ハッハハ・・・。